

ユトレヒト市参事会のデカルト召喚

倉 田 隆

島大言語文化

島根大学法文学部紀要 言語文化学科編 第34号 抜刷

2013年（平成25年）3月

ユトレヒト市参事会のデカルト召喚

倉 田 隆

I はじめに

デカルトは、1641年末から1643年末までのほぼ2年間、ユトレヒト大学とユトレヒト市参事会とを相手にした争いに対処しなけりばならなかつた。いわゆる「ユトレヒト紛争」である。この紛争の一つの頂点をなすのが、ユトレヒト市参事会によるデカルトの召喚と、それに対する彼の返答である。

市参事会の召喚状はオランダ語で書かれている。デカルトはこの召喚状に対する返答をフランス語で書き、そのオランダ語訳をアムステルダムで印刷させた。そしてそれをフランス語で書かれた返答とともに市参事会に届けているが、デカルト自身の手になるフランス語の返答は失われた。

本稿は、ユトレヒト市参事会の召喚状と、それに対するデカルトの返答を、オランダ語から和訳する試みである。オランダ語のテキストには、

Th. Verbeek, E.-J. Bos, J. van de Ven eds., *The Correspondence of René Descartes : 1643*, Utrecht, 2003. (Ver と略記)

に収録されているものを使用した。また、テキストの異同の確認や訳出のために、以下の文献を参照した。

Œuvres de Descartes, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, 11 tomes, Paris, 1897-1913, 1964-1974, 1996. (AT と略記)

Descartes Correspondance, publiée par Ch. Adam et G. Milhaud, 8 tomes, Paris, 1936-1963. (AM と略記)

René Descartes, Tutte le lettere 1619-1650, a cura di G. Belgioioso, Milano, 2005, 2009. (B と略記)

A. Baillet, *La vie de Monsieur Descartes*, Paris, 1691, Genève, 1970.

II 召喚までの経緯

市参事会の召喚状とデカルトの返答の内容を見る前に、召喚に至るまでの経緯を概観しよう。

1641年12月8日¹⁾、デカルトの「新哲学」の信奉者で、ユトレヒト大学医学部教授のレギウス (Regius/Henry le Roy, 1598–1679) は、自らが主宰する討論会において、「人間は偶有性による存在である」等、いくつかのテーゼを提出した。これに対して真っ向から反対の論陣を張ったのが、プロテスタントの牧師で、当時ユトレヒト大学総長だった神学教授ヴォエティウス (Gisbertus Voetius, 1589–1676) である。

これがユトレヒト紛争の直接の契機となった。それまでもデカルト哲学の擁護派と反対派の対立はあったが、それは大学内部の論争で収まっていた。しかし、この時のレギウスとヴォエティウスの対立に、デカルトはレギウスとの往復書簡を通じて関与していくことになる。

ただし、デカルトは当初、ヴォエティウスとの対立を先鋭化させていくレギウスにしきりに自制を促し、ヴォエティウスに対するレギウスの答弁の草稿が送られてきた時には、レギウスが「危険を十分避けようとしてない」し、その答弁は「提示された事柄に対しても、現今の状況に対しても、十分適切であるとは思われない」と述べて、代案を提示している²⁾。また、答弁書の出版については、「沈黙を守り時宜を待つように」と忠告している³⁾。

しかし事態は悪化する。レギウスの答弁書は出版され、それに対してヴォエティウスは、大学の全体集会を召集した (2月18日と翌19日)。その集会で彼は、レギウスの文書が、ヴォエティウス自身、総長職の尊厳、および教授たちと大学全体に対する誹謗文書であると訴え、この書の禁止と、デカルトの「新哲学」の追放を市参事会に求めた。その要請を受け、市参事会はこの答弁書を差し押さえた。

さらに1642年3月25日、市参事会は、公的であれ私的であれ医学以外の授業することをレギウスに禁じ、レギウスの答弁に関する裁決を下す権限を大学評議会に与えた。教授たちはそれに応じて、3月27日、同僚を直接攻撃するレギウスのやり方を非難し、「未熟な学生に悪影響を与える新哲学」を拒絶する裁決を、総長ヴォエティウスの名で宣告した⁴⁾。

レギウスは1642年3月31日、事の成り行きをすべてデカルトに伝え、市参事会の命令書、大学の裁決文、レギウスの答弁書に反論してヴォエティウスの息子 (Paulus Voetius, 1619–1667) が提出したテーゼ、これらを彼に送った⁵⁾。これに対してデカルトは、ヴォエティウスの息子のテーゼも大学の裁決文も笑うべきもので、「あなたの敵たちは、彼らに相応しい武器で自分の首を絞めて

いる」のだから、気に病む必要はない、とレギウスを慰めている。また、医学以外の講義禁止命令については、レギウスの同僚たちの不平を抑えるために下されたもので、「市参事会がなしうる限り寛大で賢明な措置」だと評価している。それゆえ、ヒポクラテスとガレノス風に医学を教える以外には、何も教えず黙っていることを勧め、「もし闘いを再開しようとするならば、あなたは再び運命に身を委ねることになってしまう」と、なおもレギウスの自制を促している⁶⁾。

事態は、1642年5月に刊行されたデカルトの『ディネ師宛書簡』によって、新たな段階に入る⁷⁾。「私が少々争いをする必要がある」⁸⁾と感じたデカルトは、この書簡の中で、大学の裁決文の全文を載せ、それに逐一コメントを付して、この裁決は、ヴォエティウスが総長という立場を悪用して、自分の個人的利益のためにでっち上げたものだとして批判した。また、ユトレヒト大学の教授たちを、ヴォエティウスに操られ脅されている人たちであると決めつけた⁹⁾。

当然ヴォエティウスは憤慨した。彼の以前の弟子で当時フローニンゲン大学の論理学・自然学教授だったスホーキウス (Martin Schoockius, 1614-1669) への手紙の中で、ヴォエティウスは怒りをぶちまけ、スホーキウスがデカルトにして大規模な攻撃を仕掛けるよう示唆した。

その仕事は1642年の夏から開始された。当初は気の進まなかったスホーキウスは、ヴォエティウスとその周囲の人たちの圧力に屈し、この年の夏の休暇中滞在したユトレヒトで、『デカルト哲学あるいはルネ・デカルトの新哲学の驚くべき方法 *Philosophia Cartesiana sive Admiranda Methodus novae Philosophiae Renati des Cartes*』と題する文書の作成に着手した。夏が終わり、スホーキウスは、自分の草稿のかなりの部分を後に残して、フローニンゲンに帰った。フローニンゲンに帰ると彼は、自分が厄介な立場に陥っていることに気づいたようだ。しかも、彼が書いたものは、本当に自分が書きたかったものではなかった。彼は、書いたもの何枚かを、書き直すために返してくれるよう頼んでさえたようだ¹⁰⁾。

ともかく、『驚くべき方法』の原稿は、1642年11月に印刷業者に持ち込まれた。この本の出版は1643年3月後半まで遅れるが¹¹⁾、デカルトは、すでに1642年12月7日には、この本の最初の部分が印刷された数枚を見ている。そして友人のメルセンヌ神父 (Marin Mersenne, 1588-1648) に、その返答を書くつも

りだと語る。

「私自身の利益だけしか考えないならば、その本に一言でもわざわざ返答する気にはならないでしょう。しかし、彼は一つの町でつましく暮らす人々を統治しているわけですが、そこには私に好意的であり、かつ彼の権力が弱まることを喜びとするような、多くの実直な人々がいて、私はその人たちの好意に応えることを強制されるでしょうから、その本が出るとすぐに私の返答を印刷させたいと思います。というのも、私の答弁は短いでしょうし、彼の本はとても厚く、しかもあまりにも非常識なので、私は最初の数枚を検討して、そこから彼に言うべきだと思うことのすべてを言った後では、残りは読むにさえ値しないとして無視するだろうからです。」¹²⁾

デカルトの返答は、1643年5月に『ヴォエティウス宛書簡』として出版される。しかしデカルトは、『驚くべき方法』の著者が少なくとも名義上はヴォエティウスではないことに、この本を読み進むうちに気づいていた。『驚くべき方法』の著者は自らのことを、オランダの辺鄙な片隅——したがってユトレヒトではありえない——に住んでいる者であると言い（33ページ）、さらに、ヴォエティウスを私の師と呼んでいる（57ページ）からである¹³⁾。それにも拘わらず、デカルトはこの『ヴォエティウス宛書簡』において、その本の著者をヴォエティウスと見なして、辛辣な批判を展開した。デカルトはそれに関して、この書簡の中で次のように述べている。

「それまでは私は、あなたがこの本の著者であると思われていたということ、まったく疑うことができませんでした。そしてその理由は、最初の6枚の紙が、あなたによって書かれたものとして私に送られてきて、諸証明があなたの家で訂正されていると聞かされたから、というだけではありません。主要な理由は、書かれたものが明らかにあなたの文体だということ、これほど多くの忌まわしい言葉はあなたからしか出てくるはずもないということ、そして、私の『ディネ師宛書簡』、この書簡はこれらの紙の中で唯一引用されているものですが、この書簡を攻撃する理由はまったくあなたにしかないということです。あなた以外には誰も、この書簡のゆえにこれほどまでに激しい怒りに駆られることはありえないでしょう。たとえその人があなたの友人の一人だとしても。そしてさらに、あなたは、あなたの大学の評議会において、「裁決」を大学の名において公刊するようにと、あなたのお僚たちをなおも促している時に、以下のように宣言したのです。あなたはあなたの言い分を述べずにはおか

ない、つまり私に反対して何か書くだらう、と。」¹⁴⁾

しかし、『ヴォエティウス宛書簡』において、その著者をヴォエティウス自身と決めつけて論難したことで、デカルトは名誉毀損の罪に問われることになる。

1643年6月15日、ユトレヒト市参事会は、市参事会を代表する2名と、大学を代表する2名からなる委員会を設け、この書簡を検討して提言するようにと命じた。委員たちは、法的な審問を開始するよう提言した。その理由は、デカルトの告発は非常に深刻なものであるから、もしデカルトが正しければ、ヴォエティウスは不正行為の廉で罰せられるべきであるし、もしデカルトが誤っているのならば、デカルトは名誉毀損の廉で罰せられるべきである、というものだった¹⁵⁾。

市参事会は、ヴォエティウスの行状に関する『ディネ師宛書簡』と『ヴォエティウス宛書簡』の記述について説明を求めるために、1643年6月13日（旧暦、新暦では6月23日）の日付で、3週間以内にユトレヒトに出頭することをデカルトに要請する揭示文書を貼り出した。これが本稿のⅢに訳出したユトレヒト市参事会の召喚状である。

デカルトは、この召喚に応じるべきか否か、ハーグの弁護士(Paulus Vanpeene, 1590–1656)に助言を求めている。その弁護士は「ユトレヒト市当局の人々の文書は私[デカルト]に何らの義務を負わせるものでもない」と確言した。そこでデカルトは、召喚に応じる必要はなく、「その文書に対応するにはこれで十分だろう」と考え、文書で返答することにした。その文書が本稿のⅣに訳出したデカルトの返答である¹⁶⁾。

- 1) 日付は新暦。以下、特に断らない限り、日付は新暦を用いる。
- 2) 1642年1月末レギウス宛書簡(AT III, 491–510; AM V, 111–140; B, 1586–1605)。なお、括弧内の各版に付したアラビア数字は、それぞれの版の該当ページである。
- 3) 1642年2月2–16日レギウス宛書簡(B, 1610–1611)。
- 4) 裁決の全文はAT III, 551–553に採録されている。
- 5) 1642年3月31日レギウスからデカルト宛書簡(AT III, 557–558; AM V, 184–185; B, 1630–1633)。この書簡は、各版とも、Baillet II, 155–156からの引用である。
- 6) 1642年4月初旬レギウス宛書簡(AT III, 558–560; AM V, 186–188; B, 1632–

- 1635)。
- 7) 『ディネ師宛書簡』(AT VII, 563–603) は、『省察』の「第七反論」に対する答弁として、『省察』第2版に付録として掲載されたものであるが、そこにヴォエティウスに対する批判も書き加えられた。
 - 8) 1642年4月26日ホイヘンス宛書簡(AT III, 783–784; AM V, 191–192; B, 1636–1639)。なお、ホイヘンス(Constantin Huygens, 1596–1687)は、オランダ総督オラニエ大公の秘書官で、デカルトの支持者。
 - 9) 『ディネ師宛書簡』AT VII, 588–589, 596。
 - 10) Baillet II, 178–179を参照。また Ver, 185–186も参照。
 - 11) ヴォエティウスが、カトリックとプロテスタントの両信徒からなるスヘルトーヘンボスの「聖母マリア友愛会」に対する自作の攻撃文書の印刷を、『驚くべき方法』の印刷よりも優先させたためである。1643年1月5日ホイヘンス宛書簡(AT III, 799–801; AM V, 247–248; B, 1694–1697; Ver, 15–16)を参照。また Ver, 187–186も参照。
 - 12) 1642年12月7日メルセヌ宛書簡(AT III, 597–605; AM V, 237–240; B, 1682–1687)。
 - 13) Baillet II, 177を参照。また Ver, 187も参照。
 - 14) 『ヴォエティウス宛書簡』AT VIII–2, 55。
 - 15) Ver, 189を参照。
 - 16) 1643年7月10日ウィレム宛書簡(AT IV, 16–17; AM VI, 19; B, 1800–1801; Ver, 111)。また、Ver, 191を参照。

Ⅲ ユトレヒト市参事会の召喚状

オランダ語テキストは、Ver (219–220) と AT III (696–697) に収録されている。本稿では、Ver のテキストを再録して、AT との異同を示した。また、そのフランス語訳が AT IV (645–646) と AM V (318) に収録されている。訳出に際してこれらを参照した。

なお、Ver のオランダ語テキストには改行がいつさいないが、本稿では文章を適宜区切って訳出した。

De Vroetschap der Stadt Utrecht in ervaringe gecomen sijnde, dat onlanghs is uyt-ghegeven ende verspreyt wordt, seecker Boeckgen, in dit Jaer 1643 ghedruckt

tot Amsterdam, by Louijs Elsevier, geintituleert : *Epistola Renati des Cartes ad celeberrimum virum, etc.* ende niet langh te vorens seeckeren Brief, daer van het opschrift is : *Admodum Reverendo Patri Dineto etc.* ende dat in 't laetste uytghegevene den naem van seecker Persoon, sijnde binnen dese Stadt in publijcque bedieninghe, door-gaens werdt ghespelt, ende sijne actien, leven omme-gangh, manieren, studien, leere ende institutien sulcx werden beschreven, dat nae het oordeel van onpartydighe ende hun dies verstaende Mannen, welcker advijs daer over is versocht, sodanighe Persoon in humeur ende conditie daer by beschreven, niet alleen onnut, maer oock ten hoochsten schadelick soude wasen in eenighe publijcque bedieninghe, so vande Academie, als vande Kerck.

Louijs Elsevier : LOUIJS ELSEVIER (AT) virum, etc. : *virum etc.*, (AT)

Dineto etc. : *Dineto, etc.*, (AT) sijne : *sijn* (AT) so : *soo* (AT)

ユトレヒト市参事会は以下のことを知るに至った。即ち、本年1643年にアムステルダムでルイ・エルゼヴィエ¹⁾によって印刷され、『いとも著名なる士へ宛てられたルネ・デカルトの書簡云々』と題された或る小冊子²⁾が、最近出版され配布されたこと。またそれより少し前に、『いとも畏きディネ神父様へ云々』と表書きされた或る書簡³⁾が出版され配布されたこと。さらに、最近出版されたその小冊子の中では、当市において公職に就いている或る人物の名がたびたび取り上げられ、その人物の行動、生活、交際、作法、研究、学説、そして教育が描写されているが、これについて意見を求められた公平で有能な人々の判断によれば、そこで描写されているような気質と性状の人物は、大学であれ教会であれ、その公務に無用であるだけでなくきわめて有害であろう、ということ。これらのことを知るに至ったのである。

- 1) エルゼヴィエ (1604-1670) は『省察』第2版 (アムステルダム版) の出版者。
- 2) 既述の『ヴォエティウス宛書簡』のこと。
- 3) 既述の『ディネ師宛書簡』のこと。

Waer-omme Wy 't selve ter herten nemende, ende overleydt hebbende, hoe de waerheydt der saecke best nae ghespeurt, de gherustheydt der Stadt, den dienst vande Kercke al-hier, mitsgaders het floreren der Academie ten hoochsten ghevordert, alle onrust, onstichtinghe ende aenstootelicheden gheweert mochten worden, goedt ghevonden hebben de saecke naerder te ondersoecken :

それゆえわれわれは、以上の点に留意し、いかにすれば、この件に関する真実がもっともよく調査されうるか、当市の平穩、当地教会の聖務、さらには大学の繁栄がもっともよく追求されうるか、混乱をまねき教導にそむき害悪をもたらすようなあらゆることが防がれうるか、について慎重に検討した結果、この件に関してさらに詳しく調査すべきだという見解に達した。

Tot welcken eynde wel van meeninghe souden sijn den voornoemden *des Cartes*, indien hy onder de Jurisdiction onser Stadt sich onthielde te constringeren sijne voorsz. twee Tractaten, met bewijs daer toe dienende te munieren, om den Persoon daer-inne ghementioneert daer tegens ghehoort, alsdan gedaen te worden, sulcx die acquiteyt der saecke, ende het beste der Academie ende Kercke soude vereysschen.

voornoemden : voornaemden (AT) voorsz. : voorsz (AT)

daer toe : daertoe (AT) munieren, : munieren (AT) gedaen : ghedaen (AT)

そのためには、前述の2論文において言及されている人物が敵対的に語られているがゆえに、訴訟の公平および大学と教会の最善が要求するような仕方で事が運ばれるように、上記デカルトが当市の裁判管轄権の下にあるのならば、彼にそれら2論文の証拠となるものを揃えさせる、ということが考えられるであろう。

Dan aen-ghesien den voornoemden *des Cartes* sich onthoudt buyten deser Stadts Jurisdiction, ende datmen al-hier onseecker is vande plaetse sijner residentie :

voornoemden : voornaemden (AT) Cartes : *Cart's* (AT)

しかるに、上記デカルトは当市の裁判管轄権外にあり、彼の居住地も当方に定かではない⁴⁾。

4) デカルトは1643年6月26日のホイヘンス宛書簡(AT III, 821-824 ; AM V, 318-321 ; B, 1776-1779 ; Ver, 93-95)の中で、「彼らは私の居場所を知らないふりをしている」として、市参事会の通知の仕方を非難している。

Soo ist, Dat Wy goedt ghevonden hebben by Publicatie bekend te maecten, dat den selven *des Cartes* sich al-hier binnen Utrecht sal moghen in-stellen binnen den tijdt van drie weecken (ghenietende ten dien fine vry acces ende reces) omme den inne-houden vande voorsz. Tractaten sulcx te verifiren, als hy sal oordelen tot sijne

intentie dienstich te wesen, ende den voornoemden Persoon daer tegens ghehoort, ende sijn bewijs ghesien, voorts ghedaen te worden naer behoren.

voornoemden : voornaemdem (AT)

それゆえ、彼が自らの目的に役立つと判断するような仕方、前記論文の内容の検証が行われるように、また、その論文で敵対的に語られている上記人物について、そしてそれを裏付ける証拠について調査することによって、事がいっそうしかるべく運ばれるように、デカルト自身が3週間以内に当地ユトレヒトに出頭すべき（このための自由な往來を享受できる）旨、公示して通告するのがよいとわれわれは考えた。

Ende om dat den voornoemden *des Cartes* hier van te beter kennisse sal connen becomen, hebben 't selve al-omme, sulcx men Stadts Publication ghewoon is, doen affigeren.

voornoemden : voornaemden (AT)

なお、上記デカルトがこのことについて知りうるためのいっそうの便を図り、これを当市の通例の公示場所すべてに掲示させることにした。

Aldus gepubliceert naer voor-gaende Clock-luydinge vanden Stadt-huyse t'Utrecht, *more solito*, op den xiiij^{en} Junij 1643. By my, C. de Ridder.

xiiij^{en} : XIII^{en} (AT) C. de Ridder : C. DE RIDDER (AT)

以上、1643年6月13日⁵⁾、慣例に従って、ユトレヒト市庁舎の鐘の音に次いで、私 C. de リデルにより公示。

5) 旧暦。新暦では6月23日。

IV デカルトの返答

オランダ語テキストは、Ver (108–110) , AT IV (8–12) , AM VI (11–16) , B (1792–1797) に収録されている。本稿では、Ver のテキストを再録して、AT, AM, B との異同を示した。オランダ語からのフランス語訳は、AT IV (646–648) と AM VI (11–16) に収録されている。また、B (1792–1797) にはイタリア語訳が掲載されている。訳出に際してはこれらを参照した。

なお、Ver のオランダ語テキストには、冒頭の起首 (Myn Heeren) と末尾の

留書・署名・日付以外に改行はいっさいないが、本稿では文章を適宜区切って訳出した。

Myn Heeren,

Ick hebbe reden U. Ed. te bedancken, dat mijne rechtveerdighe klachten haer beweeght hebben te ondersoecken het leven van eenen man die zijnde in publijcquen dienst van uwe Stadt, my ten hoochsten heeft veronghelijckt ; als oock dat het U. Ed. ghelieft heeft my daer van te verwittighen, om haer nochmaels van bericht te kunnen dienen, *sulcx als ick sal oordelen tot mijne intentie dienstich te wesen*, by aldien ick eenighe bewijs-rendenen passende op 't geen ick van hem gheschreven hebbe, mochte naegelaeten hebben.

Myn : Mijn (AT/AM/B) publijcquen : publycquen (AT/AM/B)

ghelieft : ghelieft (AT/AM) geen : gheen (AT/AM)

naegelaeten : naghelaten (AT/AM), naegelaten (B)

拝啓¹⁾

私はあなた方にお礼を申し上げなければなりません。と申しますのも、あなた方は、私の正当な不服に動かされて、貴市の公職にありながら私をこの上なく傷つけた人²⁾の行状を、調査する気になられたからです。そしてまた、御親切にもそのことを私にお知らせ下さり、彼について私の書いたことに関連する何らかの証拠をもし私がおろそかにしていたのならば、「私の目的に役立つと思えるような」³⁾証言を、もう一度あなた方に申し述べることができるようにして下さいからです。

- 1) 既に述べたように、デカルトは7月6日付のこの返答をフランス語で書いたが、それは、2日後にアムステルダムで印刷されたオランダ語訳とともに、7月10日にユトレヒトに届けられた。フランス語のオリジナルテキストは失われた。デカルトは7月10日にホイヘンスに、オランダ語に翻訳されたこの返答を送っている。ホイヘンスはデカルトに、市参事に宛てた嘆願書を書き、それをオランダ語に訳して当局に出頭してくれる有能な弁護士を代理人として立てるよう勧めていたが、デカルトはこの返答がその嘆願書の代わりにならないか、ホイヘンスに問うている。1643年7月10日ホイヘンス宛書簡(AT IV,13-14; AM VI, 17-18; B, 1800-1803; Ver, 112-113)を参照。
- 2) ヴォエティウスのこと。

- 3) 「 」内は、デカルトが召喚状の文言を若干修正して引用している文言。Ver はこのことを指摘し、この箇所をイタリックにしている。AT, AM, B にはその指摘はなく、イタリックにしていない。

Ende by dese ghelegentheyt soude ick my tot Wtrecht laeten vinden om U. Ed. daer in te helpen ende ten dienste te zijn nae mijn vermoghen, by soo verre ick konde oordelen, dat mijne teghenwoordicheyt daer toe nodigh ware; ende dat mijn voornemen ware hem voor U. Ed. in rechte te betrecken.

ghelegentheyt : ghelegenthey (AT/AM/B) Wtrecht : Utrecht (AT/AM/B)

laeten : laten (AT/AM/B) teghenwoordicheyt : tegenwoordicheyt (AT/AM)

nodigh : nodig (AT/AM)

ですからこの機会に、私はユトレヒトに赴き、そこであなた方のお手伝いをし、私の能力に応じてお役に立つべきなのでしょう。ただしそれは、私の出頭がそのために必要であり、私の意図は彼をあなた方の前で告訴することだ、と私に思える限りにおいてのことです。

Maer soo als ick van hem in 't openbaer ben veronghelijckt, alsoo hebbe ick mijne saeck in 't openbaer bepleyt, als dat betaemde.

veronghelijckt : verongelijckt (AT/AM) alsoo : also (AT/AM)

als dat : alsdat (AT/AM)

しかしながら、私は彼に公然と傷つけられたのですから、それに相応しく、私は同様に公然と私のことを弁護したのです。

Ende hebbende voorghenomen den redelijcken Leser te voldoen ende te vernoeghen, is met voordacht het laest ghedruckte, waer van het opschrift hout : *Epistola Renati des Cartes ad celeberrimum virum etc.* in sulcker voeghen in-ghestelt, dat de bewijsen die vereyst worden tot verificatie van 't geen ick van dien man gheschreven hebbe alomme daer by worden ghevonden, soo veel men de selve met reden van my soude kunnen vereyschen.

voorghenomen : voorgenomen (AT/AM) vernoeghen : vermoegen (AT/AM)

ghedruckte, : ghedrukt (AT/AM) etc. : etc., (AT/AM)

in-ghestelt : inghestelt (AT/AM/B) bewijsen die : bewijsendie (AT/AM)

alomme : allomme (AT/AM/B)

そして私は、公正な読者を満足させその信頼を得ようと決意して、『いとも著名なる士へ宛てられたルネ・デカルトの書簡云々』⁴⁾と題する最近の印刷物を作成したのです。その作成に際しては、私がこの男について書いたことを立証するために要求されている証拠は、それが理に適って要求されうるものである限り、そこで至るところに見出されるように注意を払いました。

4) 既述の『ヴォエティウス宛書簡』のこと。

Wt welcker insichte ick achter–weghen ghelaten hebbe verscheyden van sijne bysondere actien die my bekend zijn, om niet ghehouden te zijn daer toe ghetuyghen voor te brengen, hebbende maer aengheroert eenighe van sijne actien die voorgevallen zijn in ’t openbaer ofte ommers in ’t byweesen van personen die by U. Ed. zijn in publike bedieninghen, door de welke sy de waerheyt kunnen weten soo daer aen wort ghetwijffelt.

Wt : Uit (AT/AM/B) daer toe : daertoe (AT/AM)

ghetuyghen : ghetuygen (AT/AM) aengheroert : aengeroert (AT/AM)

byweesen : bijweesen (AT/AM/B) aen : an (AT/AM)

このような考えから私は、私に知られている彼のさまざまな行動については、その証拠を提出しなくても済むように、いちいち取り上げることせず放っておきました。それよりも私は、公然となされた彼の行動、あるいはともかくも、あなたの方のもとで公務に就いている人たち、そして、疑わしいことがあればその人たちを通してあなた方が真実を知ることができるような人たち、そのような人たちがいるところでなされた彼の行動、そういう行動のみに触れることにしたのです。

Maer ick hebbe my voornaementlijck bemoeyt met sijne schriften te ondersoecken, sulcx dat men maer heeft nae te sien de plaetsen die door my worden aengheweesen ende daer by ghemelt om te weten met wat recht ick hem daer over bestraft hebbe.

bestraft : bestrast (AT/AM)

とは申しましても、私が主として取り組んだのは、彼の書いたものを調べることでした。それに関して私が彼を非難したのにはどんな正当性があるのかを知

るためには、私が指摘し言及した箇所を点検するだけでよいからです。

Ende schoon ghenomen dat hy niet te verantwoorden en hadde de lasteringen van het schandelijck boeck dat onlanghs in uwe Stadt ghedruckt is met den tijtel van *Admiranda Methodus novae Philosophiae Renati des Cartes*, ofte *Philosophia Cartesiana*, daer van hy hem soo my bericht wort, soeckt te ontschuldighen, U. Ed. sullen daer beneven verscheyde andere dinghen vinden, die ick klaerlijck bewesen hebbe, alleen uyt de gheschriften die sijnen naem voeren, ende van hem niet konnen ghelochent worden, om daer uyt te verstaen 't geen U. Ed. ghelieven te ondersoecken, naementlijck of hy sijner ampten weerdigh is.

Cartes, : *Cartes* (AT/AM/B) voeren, : voeren (AT/AM)

ondersoecken, : ondersoecken (AT/AM/B)

彼は、『ルネ・デカルトの新哲学の驚くべき方法』あるいは『デカルト哲学』と題して貴市で最近印刷された破廉恥な本⁵⁾の誹謗中傷について、説明すべき責任を何も果たすことなく弁解に努めている、と私は聞いております。それでも、彼の名前が記されていて、しかも彼が否認することのできない文書のみに基づいて、私のはっきりと示したさらに多くのさまざまなこと⁶⁾を、あなた方は見出すでしょう。そしてそれらのことから、お調べになるつもりでおられることを、つまり、彼がその公職に相応しいかどうかを、あなた方は御理解なさるでしょう。

- 5) 既に述べたように、この本の少なくとも名義上の著者はスホーキウス。ヴォエティウスに委託によるものだが、彼の名は表に出ていない。デカルトは『ヴォエティウス宛書簡』において、この本の全責任をヴォエティウスに帰している。
- 6) デカルトは『ヴォエティウス宛書簡』の中で、彼とヴォエティウスとの間の論争を、スヘルトーヘンボスの聖母マリア友愛会に関するヴォエティウスとフローニンゲン大学神学教授デマレとの間の論争に関連づけようとした。デマレ (Samuel Desmarets/Maresuis, 1599–1673) は1642年までスヘルトーヘンボスの牧師で、その地の聖母マリア友愛会を巡ってヴォエティウスと論争した。1643年1月デマレ宛書簡 (AT III, 605–607; AM V, 241–242; B, 1688–1691; Ver, 21–22) を参照。

In voeghen dat de onpartydighe ende hun des verstaende mannen die gheoordeelt hebben dat sodaenighe persoon in humeur ende conditie daer by beschreven niet

alleen onnut, maer oock ten hoogsten schaedelijck soude wesen in eenighe publike bedieninghe soo vande Academie als vande Kercke, hem veroordeelt ende sijn vonnisse schijnen ghevelt te hebben :

onpartydighe : onpartijdighe (AT/AM) / onpartijdighe (B)

hebben : hebben, (AT/AM) / hebben, (B)

beschreven : beschreven, (AT/AM) / beschreven, (B)

hoogsten : hoogsten (AT/AM)

bedieninghe : bedieninge, (AT/AM) / bedieninghe, (B)

vande : van de (AT/AM) vande : van de (AT/AM)

それゆえに、「公平で有能な人々は、私が描いたような気質と性状の人物は、大学であれ教会であれ、その公務に無用であるだけでなくきわめて有害であろうと判断して」⁷⁾、彼を糾弾しその裁きを下したのだと思われます。

- 7) 「 」内は、デカルトが召喚状の文言を若干修正して引用している文言。Verはこのことを指摘し、この箇所をイタリックにしている。AT, AM, Bにはその指摘はないが、Bはこの箇所をイタリックにしている。ATとAMはイタリックにしていない。

Want ick hebbe by-na doorgaens niet als mijne redenen by ghebracht, laetende den Leser sijne vrijhey om daer uyt te besluuten 't geen daer uyt komt te volgen :

by-na : bij nae (AT/AM) / bijna (B) by : bij (AT/AM/B)

volgen : volghen (AT/AM)

実際私は、ほとんど常に私の論拠を提示することしかせず、その論拠から引き出されることを結論するのは読者の自由に任せました。

Sulcx dat desen man sich selven niet en sal kunnen suyveren van 't geen de onpartijdighe teghens hem hebben besloten, ten zy hy mijne redenen wederlegghe door andere soo bondighe redenen, dat ick de selve niet en sal kunnen bewijsen krachteloos te zijn, ende dat de on-partijdighe Lesers het tegen-deel daer uyt kunnen besluuten.

sal : 欠落 (AT/AM) bewijsen : bewijsen, (AT/AM)

on-partijdighe : onpartijdighe (AT/AM/B) tegen-deel : teghen-deel (AT/AM)

それゆえこの男は、他の非常に堅固な論拠によって私の論拠を反駁しない限り、公平な人々が彼に反対して下した結論を免れ、身を浄めることはできないでしょう。そのような論拠は、それが無力であることを私にはまったく証明できないほどに堅固で、また、公平な読者が逆の結論を下すことができるほどに堅固なものでなければなりません。

Maer niet-te-min dewijl al de Werelt oordeelt dat hy de voornaemste autheur is vande lasteringhen die in het ghemelt fameux boeck teghens my worden ghevonden, versoeck ick U. Ed. de waarheyt daer van te willen ondersoecken, die men lichtelijck sal kunnen weten uyt den Boeck-drucker ofte andere, ende niet te willen ghedooghen dat desen man U. Ed. soeck te misleyden in een saecke die soo klaer is.

oordeelt : oordeelt, (AT/AM) lichtelijck : lichtelijck (AT/AM)

Boeck-drucker : Boeckdrucker(AT/AM/B) ghedooghen : ghedoogen (AT/AM)

desen : deesen (AT/AM)

しかしそうは申しましても、他方、人々は皆、私に敵対する悪名高い上述の本に見出される誹謗中傷は、主として彼が書いたものだと判断しているのです。どうかその点について真実をお調べ下さいますよう、お願い申し上げます。その真実は印刷業者などから容易に知られるでしょう。また、この男はこれほど明瞭な件に関してあなた方を欺こうとしています、どうかそれを御容認なさらないよう、お願い申し上げます。

Ick verwachtte dit niet alleen van uwe heusheyte; maer oock van wegen mijn goet recht :

heusheyte ; : heusheyte, (AT/AM/B) wegen : weggen (AT/AM)

このことに関しては、私はあなた方の御厚情に期待するだけでなく、私の正当な権利の重みにも期待しております。

Want soo U. Ed. wel insien 't geen ick desen aengaende gheschreven hebbe, sy sullen bevinden dat ick nevens de rechtmatighe verdedinghe van mijn eere, voornaementlijck ghetracht hebbe dienst te doen aen het ghemeyne beste, ende de weerde van haere Stadt ende Academie te hant-haeven.

soo : so (AT/AM/B) nevens : 欠落 (AT/AM)

ghemeyne : ghemeine (AT/AM) hant-haeven : hanthaeven (AT/AM/B)

と申しますのも、私がこの男について書いたことに注意深く目を通して下されば、私の名誉の正当な擁護のかたわら、私は主として公共の利益に仕えようと努め、また、貴市と貴大学の尊厳を保とうと努めたということが、あなた方にお分かりいただけるからです。

Waerom ick my verwondere over de wijze die U. Ed. ghebruyckt hebben om my haere meyninghe te laeten weten, als of ick soo weynigh bekent waere in dese Provincien ende besonderlijck in haere Stadt, dat men heeft willen schijnen mijne woon-plaetse niet te weten, ofte dat ick yets ghedaen hadde dat niet loflijk en waere, ofte eyndelijck dat U. Ed. eenigh recht over my waeren hebbende, 't welck ick hier genootsaect ben te ontkennen, ende soo U. Ed. deshalven yets aennemen daer over te protesteren van onghelijck.

weynigh : weynich (AT/AM/B) woon-plaetse : woonplaetse (AT/AM/B)

't : 't (B) deshalven : derhalven (AT/AM/B)

それゆえ、あなた方の御見解を私にお知らせ下さるためにあなた方が用いられたやり方に、私は驚いております。それはあたかも、私がかちらの諸州に、とりわけ貴市にほとんど知られていないので、私の居所など知らないと思わせたがっているかのようでした。あるいはそれは、まったく称賛に値しないことを私がしでかしたかのようでした。あるいは最後に、あなた方が私に対して何か権限をお持ちであるかのようでした。私はここでそれを否定せざるをえません。したがってもしあなた方が、そのような権限があるとした上で、何ごとかを裁決するのであれば、私はその不正に抗議せざるをえません。

Maer ick en verwachtte niet dierghelijcx van uwe voorsichtigheyt, ende ick neme het alleen daer voor dat U. Ed. daer mede hebben willen te kennen geven dat sy niet als tot haer groot leet-wesen ghenootsaect zijn te ondersoecken de zeden ende het leven van desen man :

voorsichtigheyt, : voorsichtigheyt ; (AT/AM/B) daer mede : daermede (AT/AM)

しかしながら私は、思慮深いあなた方がそのようなことをなさるとは思っておりません。私がかちらのことに関して理解しているのはただ、この男の品行や行状

の調査を余儀なくされるのは、あなた方にとって極めて遺憾にことに他ならないということ、あなた方はこのようなやり方でお知らせ下さろうとしたのだということです。

Ende dat haere meyninghe is, ghelijck al het verschil 't welck ick met hem ghehadt hebbe vervat is in ghedruckte boecken, dat al het geen naemaels soude moghen voor vallen mede door den druck werde ghemeyn ghemaect, op dat al de Werelt daer van mach oordelen.

meyninghe : meyninge (AT/AM) 't : 't (B)

voor vallen : voorvallen (AT/AM) werde : worde (AT/AM/B)

op dat : opdat (AT/AM/B)

そしてまた、私と彼との間の係争のすべては、印刷された本の中に書かれているのだから、これからさらに起こりうることもすべて、人々が皆それについて判断を下せるように、やはり同様に印刷によって公にされるべきだと、あなた方はお考えだということです。

Oversulcx indien in mijne gheschriften yet van besondere aenmerkinghe wort bevonden, daer op U. Ed. naeder onderrichtinghe souden begeren, sal ick seer geerne haer de selve op sodaenighen wijze laeten toekomen, ende daer by betonen hoe veel ick haer achte, ende hoe waerlijck ick ben,

Myn Heeren,

Uwe Ed.

Oetmoedighsten ende gheneyghsten dienaer, Des Cartes

Van Egmond op de Hoef, den 6. Iulii, stylo novo, 1643.

daer op : daerop (AT/AM) onderrichtinghe : onderrichtinge (AT/AM)

ick : ich (AT/AM) sodaenighen : sodanigen (AT/AM)/ sodaenigen (B)

betonen : betonem (AT/AM) ende : en (AT/AM) ben, : ben (AT/AM/B)

Myn Heeren, : Mijn heeren (AT/AM)/ Myn Heeren (B)

dienaer, : dienaer (AT/AM) Des Cartes : DESCARTES.(AT/AM)/ Des Cartes.(B)

den 6. Iulii, stylo novo : den 6 July, stylo novo (AT/AM)/ den 6 July, *stylo novo* (B)

それにつきましては、もし私の書いたものの中に、あなた方がそれに関してさらに詳しい説明を望まれるような、特に注目すべきものが何かあれば、そのよ

うな [印刷によって公にするという]⁸⁾方法で、私は喜んでその説明をあなた方にお届けするつもりです。そしてそのようにしながら、私があなた方にどれほどの敬意を抱いておりますかを、また、私がどれほど心から以下の者であるかを、お示しすることでしょう。

敬具

あなた方の

きわめて恭順かつ従順な下僕 デカルト⁹⁾

エフモント・アン・デン・フフより 新暦 1643 年 7 月 6 日

8) [] 内は訳者による挿入。

9) AT と AM は「デカルト」を改行している。B は「あなた方の」から「デカルト」までを改行せずに 1 行で書いている。

V おわりに

ユトレヒト市参事会は、このデカルトの返答に対する行動を直ちに起こすことはなかった。市参事会は、デカルトを召喚しただけでなく、大学と地方宗務局に対しても、ヴォエティウスの行状に関する情報を求める依頼状を送っていた。この要請は、ユトレヒト大学評議会では 8 月 16 日に議論された。そこで教授たちは、ヴォエティウスに有利になるよう証言することを決定した。宗務局も翌日の 8 月 17 日、ヴォエティウスに有利な証言を述べた¹⁾。

8 月 17 日の夜、デカルトの返答、大学の証言そして宗務局の証言、これらがすべて揃ってから、ユトレヒト市参事会の会議が開催された。市参事会はレギウスを呼ぶことにした。デカルトの申し立ての多くがレギウスからの情報に基づいていると見なされたからである。レギウスは 9 月 15 日に尋問されたが²⁾、市参事会への報告によれば、「言い抜けをして答えようとしなかった」。

9 月 23 日 (旧暦 9 月 13 日)、ついに市参事会は、『ヴォエティウス宛書簡』と『ディネ師宛書簡』が、ヴォエティウス自身にとってだけでなく、市と大学にとっても、その名誉を著しく毀損し損害を与えるものであると宣言した³⁾。訴訟の性質が変わった。これまでは審問であったが、それが今や刑事訴訟の手続きへと進むことになったのである。

10 月 3 日 (旧暦 9 月 23 日)、市参事会は刑事訴訟の手続きを開始する。この手続きは、結論が出ないまま 11 月まで長引いた。11 月に入り、デカルトの

依頼を受けた友人たちの奔走が功を奏して、オランダ駐在のフランス大使ド・ラ・テュイユリ (Gaspard Coignet de La Thuillierie, 1597-1653) とオランダ総督オラニエ公 (Frederik Hendrik, 1583-1647) がこの訴訟に介入する。それによって訴訟手続きは停止された⁴⁾。明らかにこれは、ヴォエティウスの意に反するものだった。彼はデカルトに対する民事訴訟を起こそうと試みたようである。

しかしデカルトにしても、訴訟手続きの停止という謂わば中途半端な結末は満足のものではなかった⁵⁾。デカルトはスホークウスに対する訴訟を計画する。その訴訟の結果がヴォエティウスに対する新たな非難を燃え立たせることを期待したのだ。紛争の舞台はフローニンゲンに移る。

フローニンゲンの訴訟の経過については稿を改めて論じることにはしたが、『驚くべき方法』がヴォエティウスの筆によるものであることをスホークウス自身が証言するのは、1645年4月のことである⁶⁾

- 1) V, 224-226 を参照。
- 2) 1643年9月20日ホイヘンス宛書簡 (AT IV, 750-754; AM VI, 24-27; B, 1808-1811) を参照。
- 3) オランダ語の判決文は、AT IV, 20-23 および Ver, 228-231 に収録されている。また、AT IV, 650-652 および AM VI, 31-33 にはそのフランス語訳がある。
- 4) 1643年11月2日ホイヘンスからデカルト宛書簡 (AT IV, 759-761; AM VI, 45-46; B, 1826-1829; Ver, 138-139)、1643年11月17日ポロ宛書簡 (AT IV, 50-52; AM VI, 65-67; B, 1848-1851; Ver, 152-153) を参照。
- 5) デカルトは、事態が鎮静化さえすればそれでよいとは思っていなかった。すでに1643年10月23日付のポロ宛書簡 (AT IV, 28-30; AM VI, 39-41; B, 1820-1823; Ver, 134-135) の中でデカルトは、「そんなことを期待するくらいなら、私はむしろ、裁判を請求するためにハーグへ行って、私の正しさが認められるか、あるいは否定されてしまうまで、そこにとどまるつもりです」と述べている。なお、ポロ (Alphonse Pollot, 1602-1668) はハーグの宮廷侍従官で、デカルトの友人。
- 6) 1645年5月26日マチアス・パソル宛書簡 (*Archiv für Geschichte der Philosophie*, 92, issue 3, 2010, pp. 299-303) を参照。この書簡は、フローニンゲン大学評議会秘書マチアス・パソル (Matthias Pasor, 1599-1658) が1645年4月の大学評議会の裁決文に自らの手紙を添えてデカルトに送ってくれたことに対する礼状である。パソルの添え状および評議会の裁決文については、デカルト自身による写しがある (AT IV, 793-801; B, 1994-2003)。

